

男長

ひとりごと

(51)

齊藤 讓

弥生三月半ばの、晴れた日曜日
 曜日の朝である。夜来の雨もあがり、しつとりと落ちついた庭の木々や芝生の上には、やわらかな春の日差がいつぱいに溢れ、その光は窓のガラスを透して部屋の中にまで明るく射しこんできている。眼を転ずれば、垣根越しに隣家の若木の梅が、今を盛りと満開に咲き誇り、わが家の老梅までもが、これに負けじとばかりに疎な花を咲かせている。その花の枝々には、小さな水玉が無数に宿り、光を受けてまるで寶石のように七色の光彩を放っている。その様は、思わず息を飲むほど荘厳で、美しい。まさにこれは、廻り来た春の地上へのメッセージであり、自然が生きてし生けるものに対して、垣間見せる一瞬のドラマである。

思えば、こんな静かな日曜日を迎えるのは、だいぶ久しぶりだ。こんな感動から始まった。思えば、こんな静かな日曜日を迎えるのは、だいぶ久しぶりだ。

も、こんな状態を続けて、果たして本当の状況認識やその変化を的確に把握して、正しい決断と行動がとれるだろうかという疑念が湧いてくる。「走りながら考える」を motto とする性急な私ではあるが、いささか気に懸るところである。

あの時、「それにしても」という思いが、頭を過った。この数日前、私はある高等学校の卒業式に出席した。卒業生男子の誰もが、長すぎたり、短かすぎたり、元だけが細いダブダブのズボンをはいたへんちきりんな格好をし、またその顔には一片の緊張感すら感じられなかった。式典の始まる前から漂っていた。案の定、式が始まってみると司会は覇気の無い進行をし、国歌斉唱と思っ

ねているのである。一体この教育現場はどうなっているのだろうか。こんな具合であるから、生徒が歌う校歌や卒業、送別の歌も蚊の鳴くようにか細く、ろくに歌っている者もいなかった。服装は流行や個性もあるから理解するとしても、こんな無気力な若者が、これから社会の第一線に立つのかと思うと、情無さを通り越して心が寒くなった。高等学校の使命は、いま希望に燃えてその門をくぐろうとしてこの中学卒業生を、更に逞しく磨きあげ、上級学校や社会に送り出すことである。義務教育とは違うのであるから、落ちこぼれを恐れず、自信を持った峻厳な教育を強く期待したい。

桜花



また保護者、来賓に到るまでが整然とし、言わんや教師の動作にも無駄がなく、的確であった。また、生徒の服装には全く乱れはなく、国歌や校歌、卒業・送別の歌を感情こめて歌うその姿は初々しくもあり、凛々しくもあった。これこそが教える教師と、教えを受ける生徒との卒隊同士の呼吸が、一時ではなく長い時間をかけて築きあげてきた教育の成果でなくてはならない。

無感動で生彩を欠いた空気が漂っていた。案の定、式が始まってみると司会は覇気の無い進行をし、国歌斉唱と思っ

たから君が代演奏だという。音楽教師が演奏でもするのかと思ったら、何の事はない、一同を起立させて、国歌をテープで聞かせるだけのことである。どうしてそんなに国歌を生徒から遠ざけようとするのか。そのくせ校長は、登壇する度に国旗に向かって礼を重

彼等が高校を卒業して新なる旅立ちをする時には、満開の桜花で祝ってやりたいものだと思っている。

時々鏡をのぞいて、私はどうなのかと問いかけてみるが、鏡の中の自分は、何も答ええない。唯、忙しきは良しとして

また保護者、来賓に到るまでが整然とし、言わんや教師の動作にも無駄がなく、的確であった。また、生徒の服装には全く乱れはなく、国歌や校歌、卒業・送別の歌を感情こめて歌うその姿は初々しくもあり、凛々しくもあった。

無感動で生彩を欠いた空気が漂っていた。案の定、式が始まってみると司会は覇気の無い進行をし、国歌斉唱と思っ

ねているのである。一体この教育現場はどうなっているのだろうか。こんな具合であるから、生徒が歌う校歌や卒業、送別の歌も蚊の鳴くようにか細く、ろくに歌っている者もいなかった。服装は流行や個性もあるから理解するとしても、こんな無気力な若者が、これから社会の第一線に立つのかと思うと、情無さを通り越して心が寒くなった。高等学校の使命は、いま希望に燃えてその門をくぐろうとしてこの中学卒業生を、更に逞しく磨きあげ、上級学校や社会に送り出すことである。義務教育とは違うのであるから、落ちこぼれを恐れず、自信を持った峻厳な教育を強く期待したい。